



人生に、  
野遊びを。

\* snow peak  
outdoor lifestyle creator since 1958

KAMIKAWA  
**WORK**



KAMIKAWA  
WORK



# Love where you live, Live where you love.

住んでいるところを愛そう、愛しているところに住もう。

株式会社L&Gグローバルビジネス代表／ホテルプロデューサーとして活躍する龍崎翔子さん。

現役東大生でもありながら、大阪、京都、上川町、湯河原、富良野で、それぞれの土地の特長を生かしたホテルを経営。

独自のミレニアルな目線で、地域の魅力を見つめ直し最大化することを生業としている。

今回フリーペーパー『カミカワーク』編集部は、「アメリカで最も住みたい街」と多くのメディアでも言われ、

移住者に人気のポートランドを龍崎さんと一緒に巡り、

ローカルをもっと楽しむヒントを探る旅へ。

雨が降りしきる冬のポートランドで感じたのは、あったかい「LOVE」です。







1



2



5



3



4



6



7



8

# ローカルを楽しむ 22のヒント from Portland

## The Mark Spencer Hotel

1.フレンドリーなスタッフたち。旅中出会ったスタッフたちはみんなウェルカムモードで、ちょっとしたことから会話が弾む。2.オープン時、予算がなくて困っていたテナントに「看板を  
かっこよくデザインしてくれたら、私が半分出すよ」とヘルプを出したオーナーのアリックスさん。3.4.各客室には大型のビール瓶が設置してあり、近くのブリュワリーに持っていきビール  
を注いでくれる。また、コーヒーも客室になく、ロビーに自家焙煎したコーヒーを取りに行きシステム。どちらもエコであり、フレッシュかつ地元の味わいを楽しんでほしいという考えから。

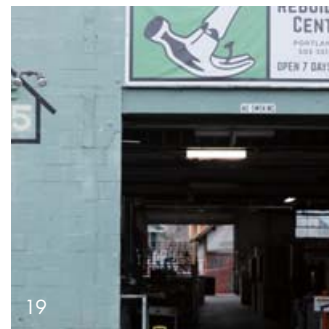
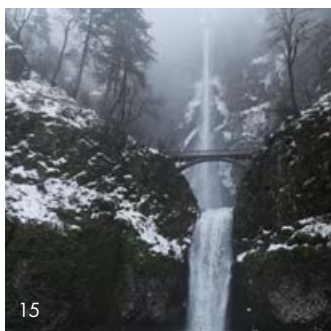
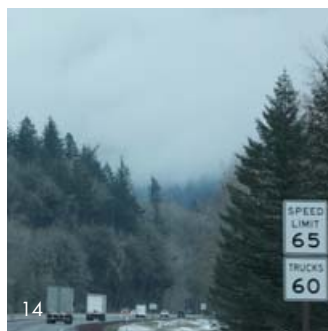
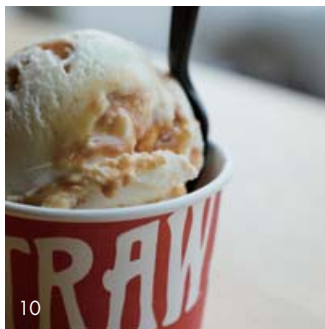
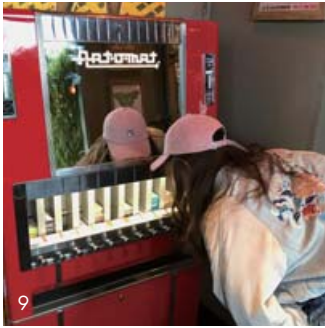
## Coava Coffee Roasters

5.「Coava Coffee Roasters」はひとつの倉庫を竹製品工場の  
「Bamboo Revolution」とシェア。「ポートランドは異質なふたつの物を  
組み合わせるセンスが高い」と、龍崎さん。

## Ace Hotel Portland

6.あの「HOTEL」の文字で有名なエースホテルのロビー。インスタ映えするだけではなく「お互いが見えているけれど視線が交差しないよう  
に作られている空間」と、龍崎さん。7.朝食のテーブルに紙ナプキンはない。洗いごらしのふきんがあるだけ。8.ランドリー袋は見た目も素材  
もきちんとデザインされている。購入も可で龍崎さんは早速購入。





9.レストラン「Radio Room」にてタバコ?かと思いきや、5ドルを入れてみると小さな木箱が。店員によるとアートだそう。10.地元民にも人気のアイスクリーム店「Salt & Straw」。もちろんオレゴン産素材を使用。11.冬の雨季でもほとんど傘を差さないポートランド市民。彼らを暖める焚火は、けっこう強火。12.塩・チョコレート・ワイン・ビター(お酒)・花と、多様で高品質な商品を扱うショップ「The Meadow」。品ぞろえはバラバラに見えるが、すべて毎日使うものだからだそう。13.腐材が敷き詰められた道。ポートランドは林業の町でもある。14.15.海も山も近いポートランド。自然を身近に楽しめるのも人気のひとつ。

16.17.18.コインランドリーとカフェが併設された「Spin Laundry Lounge」。ハンガーは持って帰って、次来たときに返してあげればいいそう。19.20.21.腐材を回収販売する「ReBuilding Center」。木材から洗面台までそろそろ。オリジナルのマグカップもそろそろのは、店への愛着の表れだろう。22.広告しない、WEBサイトない、カード使えない。どローカルのレストラン/バー「A Roadside Attraction」。冬でも屋外の暖炉の前で飲むのがベストポジションだそう。





## 無条件の愛を地域に捧ぐ。ポートランド再生の仕掛け人

### 「マークスペンサーホテル」オーナーのアリックスさんに話を聞きました。

#### リノベーションは難しい。

ーこちらのホテルはいつからやっているんですか？

アリックス・ネイサン氏(以下、アリックス)：マークスペンサーホテルは、1907年からずっとホテルとしてやってきており、100年以上が経ちます。ポートランドの1.5星ホテルでした。

龍崎翔子さん(以下、龍崎)：アリックスさんのご家族がこのビルを買ってリノベしたんですね。

アリックス：1977年、40年前くらいですね。ポートランドがとても小さく静かな町だったときに、私の母と父が買いました。何度かにわたり改装を重ねて、今に至っています。私たちがポートランドでやっていることの中で、どんなことに興味がありますか？

ーリノベーションについてお伺いしたいです。成功すれば魅力的ですが、色々な課題・難しいこともあると思うのですが、いかがですか？

アリックス：難しいです。このホテルだけでなく、近隣のビルも大事ですからね。私の家族は70年代にこのホテルを買いました。当時はとても小さな町だったんです。都会ともいえないくらいに。その上、このエリアは人が少なく、バーばかりであまりいいところではなかったんです。あまり安全でもなかったです。そういうところを改善するためには、このホテルだけでなく、町全部を変えないとダメだと思ってました。それで、70年代の頃に



まずこのビルをリノベーションすることからはじめて、80年代に隣の3つのビルを買って、オフィスビルにしました。それから2012年にレストランを開きました。「シェリルズ」というレストランです。2013年に隣のビルをリノベーションしました。「パンプスシ」というお寿司屋さん、「ティンバックツ」というカバンのお店、それから「ジースターロー」というおしゃれなお店。自分でキュレーション、セレクトしました。僕の思いでは、ホテルはホテルだけでもおもしろいですが、「コンプリートする」というビジョンで、近隣全体をエキサイティングに新しくしないと成功ではないと思いました。

龍崎：ランドスケープをデザインしていくということですね。

#### ポートランドファースト、マークスペンサーホテルはセカンド。

アリックス：雰囲気はとても大事。このホテルの雰囲気だけでなく、全部の雰囲気。10年前から、この先の10年にもビジョンを持っています。そのビジョンも少しずつリノベーションしていくことで成功できると思います。

ーどんなビジョンですか？

アリックス：私のビジョンは、人々がこの町でする体験についてのビジョンです。ポートランドはとてもフレンドリーで温かい場所です。みんなが温かい気持ちを常に持ち続けています。しかし、町全体にエネルギーを感じられるような体験を作るためには、ひとつのホテルでの体験にだけエネルギーを感じるのでは十分ではありません。この町に訪れる人は「ポートランドでの体験」として滞在の日々を記憶します。なので、私はこのエリア全体を作り上げていくことが責任だと思っています。このエリアがすてきな環境で、すてきなフィールドであれば、訪れた人にとっては「マークスペンサーホテルがすてきだった」ではなく、「ポートランドがすてきだった」という記憶として残ることでしょう。そのために私は、どんなテナントを入れるのかがいいか、どんなレストランがいいか、どんな体験を人々に提供したいか、などすべてにおいてとても注意深く選び、判断をしています。日本やその他の国の人々、アメリカの他地域から来た人々に、我々がホスピタリティを提供すると、訪れた人々は「ポートランドでは、本当にすてきな時間を過ごしたよ」と言ってくれます。私は本当に「ポートランドファースト」であり、マークスペンサーホテルはセカンドです。私自身、楽しみながらそうしていますし、「無条件の愛」だと思います。あなた方も、「無条件の愛」を町に注ぐことで、

その地域はよくなるでしょうし、すべてがよくなっていくでしょう。ご両親がいつも子どもに対して注ぐような無条件の愛。何ももらわなくても、いいんです。

#### 目の輝きで、あなたに本当に情熱があるかがわかる。

龍崎：私のホテルも同じ意見、コンセプトです。町の雰囲気をホテルにどうやって反映させていくかをすごく重視してやっているんです。おっしゃったように、実際にテナントを誘致するのはめちゃくちゃ難しいと思うんですが、どのようにやられてるんですか？

アリックス：(ため息)・・・うーん、そうですね。もうそれはそれは難しいですね(笑)。まず第一に、テナントに話をするときに私が言うのは、「あなたが本当に大事にしていることを行動で示さねばなりません」ということです。もし他人からクレイジーだと言われることがあったなら、その人はそれが好きなんです。その人はクレイジーであり続けるべきです。成功している人々はクレイジーだったりしますし。他の人と違うようになるべきだと伝えます。人は、目の輝きであなたに本当に情熱があるかわかります。熱意同士は結合したりします。人は人のことが好きなので、エネルギーを持っている人同士はおのずと集まります。あなたもおのずとそこに対して持っているエネルギーを注ぎたいと思うでしょう。第二に、あなたがすてきな場所を作ることです。あなたはすてきな建設者として、地域を安全に、快適に作らなければなりません。だから私がしていることは、他の都市と同様、ポートランドのいろいろな課題を解決することです。私は共同でこの近隣の6つのブロックを持っていますが、そのすべてに対してお金を投じ、毎日クリーニングをするサービスであったり、夜も周りを散歩けるようなセキュリティであったりを整備しています。そうすることで、私は人々に対して、「マークスペンサーホテルの近隣では、安全面に対する不安を抱えることはありませんよ」と伝えられています。

龍崎：そうですね、私もこのあたりの素晴らしいお店をたくさん目にしました。一番最初にビジネスを始めるときはテナントさんが収支の数字を気にされると思うのですが、そのときはどうされるのですか？

アリックス：いい例があります。5年前、あるアイスクリーム屋さんが私のところに来ました。そこは2人姉妹で経営していました。とてもよい2人で、私も大好きでした。その2人が私に、「ここでお店を開きたいのだけ」と言ってきましたが、私はノーと断りました。2人はなぜ？と聞いてきたので、私は言いました。「あなたがたはとても人がよくて、とても若くてビジネスをはじめたてです。だからこそ、倒産してしまうのがとても怖いのです。同じような人々をたくさん見てきたのです」と。すると彼女たちは「大丈夫、私たちには長期的なビジョンがあります」と言いました。私は「OK。ただし、1年目は低い家賃で貸すけど、2年目からは家賃を上げるよ、私もビジネスだからね」と伝えました。その後どうなったかという、彼女たちのお店は今では5店舗に広がり、ここでも一番の有名スポットになりました。時にあなたは我慢強く、やさしく示さなくてはならないのです。

#### コーヒーショップを作る気はないが、作りたいと思う人には会いたい。

龍崎：どのように、そのアイスクリーム屋さんのようなセンスがよかったり、すてきなビジョンを持っている人々を見つけてくるのですか？

アリックス：ポートランド周辺の地域に足を運ぶようにしています。そこでたくさんの人々とビジネスの話をしてネットワークを作ります。行った先でできた知り合いが店を出せる場所を探している時に、私の物件を案内したりします。例えば、明日もとあるコーヒーショップのオーナーに会うことになっています。私は今はコーヒーショップを作る気はないのですが、その人に会いたいと思います。新しい人に会うのが好きだからです。私は人と出会うことが好きですし、常に出会う機会を作るようにしています。

#### ポートランドの魅力は、小さな町であるということ。

ー編集部からも質問なんですが、ポートランドが小さな町と言ったら失礼ですが、そういう、ニューヨークに比べて小さな町の魅力っていうのはどういうところにありますか？

アリックス：そうですね・・・ポートランドはどんどん変わっています。都会になっていると思います。早いスピードで変わっているのです。でもやっぱりポートランドの魅力は、小さな町であるということですね。僕は子どもの頃のことをよく覚えています。この道を歩いたら、いつも知らない人に挨拶をする習慣があったんですね。僕のグランドマザーは70年代にこのホテルに住んでいました。それで僕はいつもこのホテルに泊まっていて、グランドマザーと2人で歩いて買い物をするときにはよく知らない人へも挨拶をしました。でも今は、ポートランドも都会で、都会とまでは言えないかもしれないけど、大きい町です。知らない人と会ったら挨拶しないですね、今は。ちょっとそれは寂しいところです。でも、どうやってポートランドのこの魅力を守るかという、人々に対してナイスになること、ハローと挨拶をすること、すてきなお店で、すてきな体験を作り、バランスのとれた生活をしていくこと。日本でも同様だと思います。日本にもすてきなコーヒーショップがあって、人々はスローライフを好んでいます。成功のために時にはかなり大変な労働もするでしょうが、ライフとワークのバランスを上手にとることを忘れないことが大事だと思います。

ーいいお話がいっぱい聞けましたね。

龍崎：ずっと聞いていたくなっちゃう！

ーぜひ次は上川町に来てお話しいただきたいですね。

龍崎：うん!!!

アリックス：行きたいです！そのときはよろしくお願いします。





# Kennedy

## 好きなことをやる → 好きな人が集まる

続いて龍崎さんと訪れたのは

ポートランドの住宅街にある「ケネディスクール」。

廃校をオーナーであるマクメナミンズ兄弟が買い取り、

名前はそのままだにリノベーション。

建物が荒れ果てる前に、その学校はホテル、レストラン、バー、

ブリュワリー、ライブホール、映画館そしてジャグジーまでを備えた

子どもから大人まで楽しめる複合施設に生まれ変わった。



元々教室だった部屋を客室にリノベーション。部屋の名前には、当時の先生の名前などが付けられている。

# School

MCMENAMINS  
KENNEDY SCHOOL

“新しいものが  
いつもベストとは限らない”



▲ 別館の客室は「本」がテーマ。部屋ごとに本が置いてあり、その本から触発されたデザインが内装に。本のセレクトはもちろんオーナー。



◀ 体育館だった場所では  
毎週木曜の夜にライブ(入場無料)が開かれている。

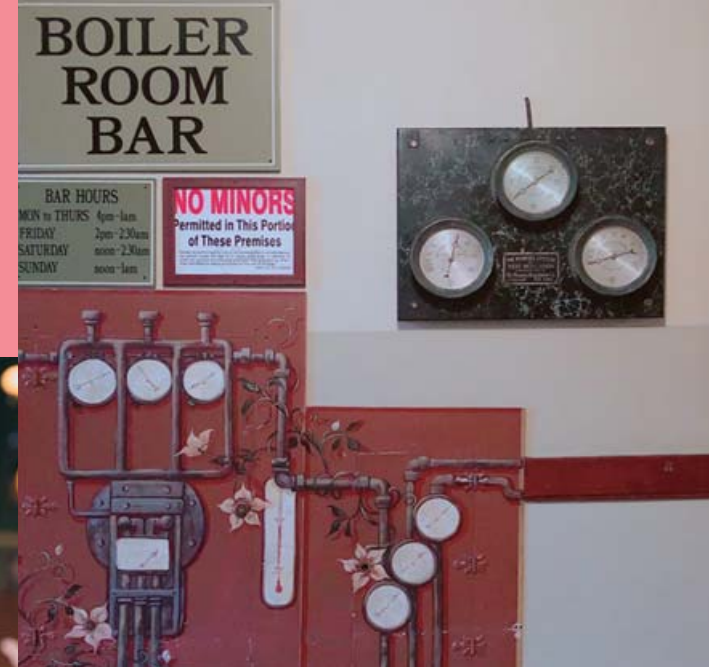




▼元々はブリュワリーとして立ち上がったマクメナミズ。  
売店のビールは、もちろん自社製のビールしか置いていない。



▼プリンシパルのレイチェルと龍崎さん。レイ  
チェルのやさしくも時折見せるるとい眼差  
しは、龍崎さんと似ている？



“見えないところも  
かっこよくしておきたい”



▼ビールの醸造スペースは一般客は立ち入ることができない場所だが、  
デザインは忘れられていない。

“ちょっと暗い方が  
みんなかっこよく見える”

▼ケネディスクールのアイコンでもあるバー「ボイラールーム」。パイプアーティ  
ストによって再構築された内装は、唯一無二の空間に。



▼食堂はレストランに。当時の面影を残しながらも、バラエティに  
富んだ照明が全く別の雰囲気仕上げている。



このクセの強さは、  
クセになる。

地元出身のマクメナミズ兄弟が経営する複合施設「ケネディスクール」。責任者のプリンシパル、レイチェルが案内してくれた。元々学校だっただけあって、「ABC」や卒業生が書いた「詩」など、あちこちに学校を感じさせる要素がサンプリングされている。新しく生まれ変わっているが、それらひとつひとつに歴史が隠されており、情報量の多さと、古くて新しいその見た目によって、不思議な空間に迷い込んだ感覚に陥る。「古いものを生かしながら、かつ自分たちのテイストを出すっていうのはすごく難しいことだと思うので、マクメナミズがそれをナチュラルにできているっていうのは、やっぱりすごいと思いましたね」と、リノベーションの難しさを同じく知るものとして龍崎さんは語る。さらに「働いている人たちは、みんなハッピーに見えますよね」と龍崎さん。見渡せば、従業員もお客も立場は違うけれども、それぞれのお気に入りの場所で互いに楽しんでいるように見える。では、なぜそのような理想的なリノベーションがここでは実現されているのか？ 詳細な分析は他に譲るとして、やはりオーナーの存在が大きいのは間違いない。レイチェルによると「次にどのプロジェクトをやるか決めるのはオーナー」で、ここにあるアートやデザインのひとつひとつまでオーナーの趣味嗜好が色濃く反映されている。「おれが好きなものを集めたぜ」以外では説明できないその空間づくりの方法は、ある意味独善的であるかもしれない。しかし、地域に生きる人間として、自分が好きなものを突き詰める。それが結局、唯一無二の空間づくりと地域のにぎわいにつながる。オーナーの強い愛情がリノベーションを成功に導いているという、実はとてもシンプルな答えがここにあるように感じる。





もっとクセを  
出していきたい。

北海道上川町の  
層雲峡温泉街にあるHOTEL KUMOI。  
古くからあったその旅館を龍崎さんら  
株式会社L&Gグローバルビジネスが  
2017年に引き継ぎ再生。  
龍崎さんはどうしてその地を選び  
そしてリノベーションという道を選んだのか？  
ヘアスタイルをショートにチェンジした彼女に、  
新たな気持ちで  
チャレンジしたいことを聞いた。

# Start with Fun in Kamikawa.





—HOTEL KUMOIを経営することになった経緯を教えてください。

龍崎：元々富良野で宿をやっていて、その時に旭川の業者さんにすごくよくしていただいていたんですけど。その方から「雲井がお店たたむらしいよ、どうだい？」って連絡をいただいたのが雲井を知る最初のきっかけだったんですね。

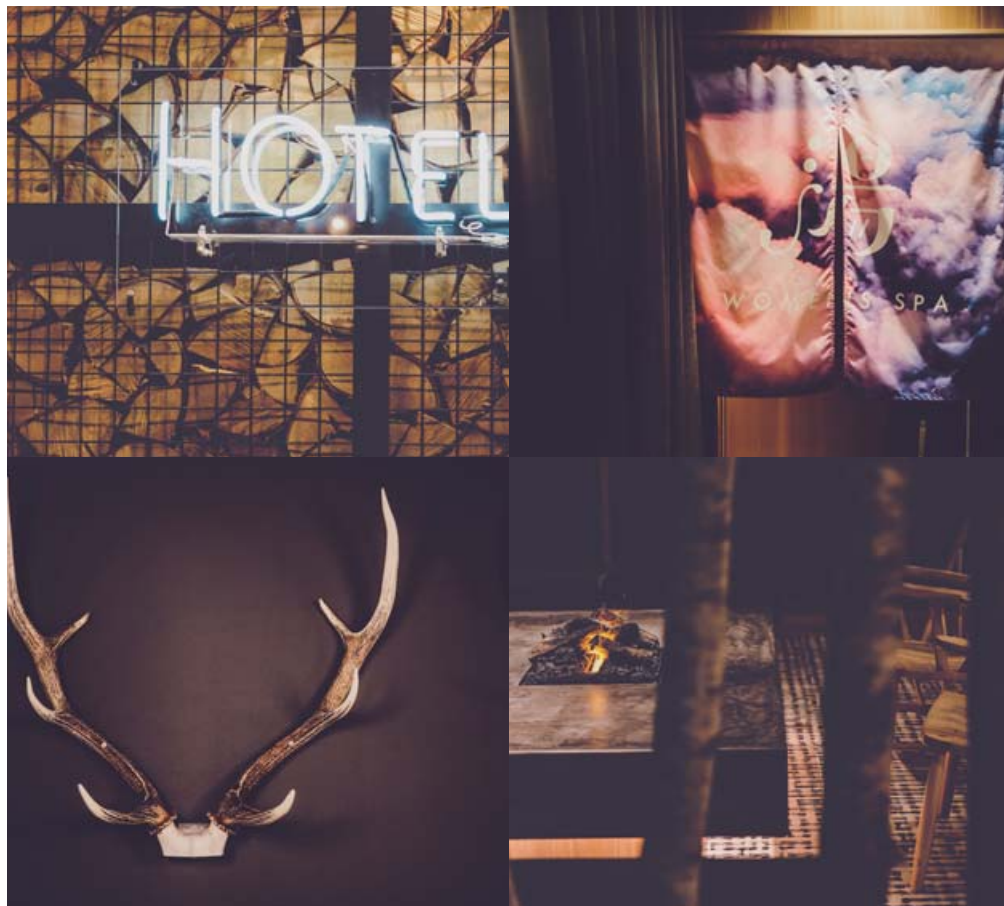
—はじめ見た時どう思いました？

龍崎：閑散期に訪れたこともあり、廃墟のようでした。でも、私は全然怖いとは思わなかったです。印象的だったのは、雲井はおかみさんが旦那さんと一緒に立ち上げたホテルなんです。そのおかみさんが言っていたのは、「自分がホテルやりたいって言ったからやらせてもらった」。大変じゃないですか？って話をすると、「そんなことは全然なくて、お客さんと話できて、やりたいことをやらせてもらえて本当に幸せ。亡くなっているんですけど、お父さんには本当に感謝している」っていうことをおっしゃって。そういう建物への愛が残っている場所だなんて思いましたね。

—どういう風にリノベーションしていったんですか？

龍崎：予算が限られている状況だったので、まず1階の共有スペースを改装しました。自分たちなりに層雲峡という街を解釈したときに「vapor(水蒸気)」というのがキーワードになると考えました。雲や霧・滝飛沫に湯気と、層雲峡の光景の中にはいつも水蒸気があります。なので、それをサンプリングしてホテル内でシーシャ(水煙草)を楽しめる、というコンセプトを打ち出しました。内装なども“シーシャをだらだら吸う”光景を念頭においてデザインしました。また、観光地で食事や買い物、飲みなどが建物内で全部完結するような旅行トレンドになると、街が一気に廃れるという現象が起きてしまうんですね。層雲峡も人通りが少ない時期は本当に寂しいので、街に人通りを作ることが非常に重要だと考え、「夜遊び」をコンセプトにおいて設計をしました。元々食堂、ラウンジ、休憩スペースだった空間を全部ぶち抜きました。食堂はビリヤードを置いたり、お酒を飲めるような雰囲気にして。ラウンジは一体感が出るようにコの字型のソファを置いたり、フィルムを映したりして、その空間としての一体感がありつつ、外からも気軽に入れる内装を目指しました。





一やり方として、更地に新しいホテルを建てるということもありますが、リノベーションをする方が、龍崎さんは好きなんですか？

龍崎：そうですね。リノベの方が正直やりやすいです。元の建物をどう生かすかって難しいんですけど、私たちの場合は、歴史をいかに盛り込むかっていうのをすごく大事にしている。意味がなくそこにあるものになりたくないんですよ。ちゃんと文脈に基づいてホテルがそこに存在しているっていう状態を目指したいので、リノベすることにしました。今回の場合はもう潰れちゃった温泉旅館をリノベーションするっていうストーリーがありますし、たとえ新築のホテルとかであっても、こういう街のこういう場所で新しくホテルを建てた、といった歴史を感じさせるような演出をすることが、お客さんと建物や街とのコミュニケーションを促進させ、愛着にもなると思うんですよね。素通りされちゃうただの箱になってしまうのは避けたくて。

一今後まだリノベーションは続きますか？

龍崎：まだ続きます。まだ計画段階ですが客室の壁を抜いてもっと客室数を減らしたり、これはもっと先の話になるかもしれないんですけど、屋上などを

サウナやスパにしたりしてちょっとリッチな空間を目指したいなと。HOTEL KUMOIはエンドレスリノベーションでやっていきたいと思っています。

一今回のポートランドでの刺激は影響ありますか？

龍崎：めちゃめちゃありますね。「自分たちらしさ」という意味で、クセは出していこうと思いました。HOTEL KUMOIは老若男女の方が来るんですよ。だからと言って、当たり障りのない空間になるのではなく、自分たちの街への愛を詰め込んだ空間にしたいと思いました。

一北海道にそういうクセの強いホテルって珍しいですもんね。地域の人たちもさらなるHOTEL KUMOIの展開に期待していると思います。

龍崎：そうですね。上川町の場合は、地元の方に応援していただいているので、本当にありがたい素晴らしいことだと思いますね。皆さん親切で。おもしろいことをする人を見つけて、引っ張り上げてくれて、一緒にやろうって応援してくださるような街です。何かチャレンジしたい人はぜひ、上川町を検討してほしいと思いますね。





# どこにでも住む

自分が好きなものを  
自由に発信して  
それに共鳴してくれる人が  
いればいい。

ニール・ハートマン (映像作家)

今まで学んできたことは  
すべてお面を彫るため  
だったんじゃないかと  
思ったんです。

紺野 龍太 (彫刻家)

場所を決める基準は  
「ああ、ここでキャンプしたいな」  
という気持ち。

西野 将 (スノーピーク 地方創生コンサルティング専務取締役)

あなた方はとても人がよくて、  
とても若く、ビジネスをはじめたてです。  
だからこそ、倒産してしまうのが  
とても怖いんです。

アリックス・ネイサン (マークスベシサーホテル オーナー)

東京って舞台みたい。  
でもそこでずっと  
踊り続けるのって  
疲れちゃうんだなって。

村上 萌 (ライフスタイルプロデューサー)

上川町に来る理由は人。  
あさひ食堂の鎌田さんに  
会いに行くとか。

北原 淳 (コンテツプロデューサー)

上川町でしか出来ないことを  
していきたい。  
代替があってはいけない。

塚原 敏夫 (上川大雪酒造 代表取締役)

山を極めることに興味はない。  
山で0から1を生み出したい。

志水 陽平 (経営者)

やりながらどんどん  
バージョンアップしていく。  
だって、初めてだよ？  
初めてだもん！

松本 明耐 (チームラボキッズ 代表)

私たちってどうなっても死にはしないと  
思っているじゃないですか。  
だから生存欲求より  
承認欲求なんです。

アサイア サミ (編集者)

町に住む人の誇りになるような  
心が豊かになる  
まちづくりをしたい。

佐藤 芳治 (上川町長)

自宅兼、オフィス兼、趣味のショップ  
みたいなそういう文化が広がれば  
いいのにな。働く場所も広がるし、  
そこに人が集まりますよね。

龍崎 翔子 (ホテルプロデューサー)

どこで生まれたかは  
ハンデじゃない。  
どこで生まれたって、  
何にでもなれる。

遠藤 香 (チームラボキッズ カタリスト)

タウンアイデンティティーのような、  
上川町とは何者だ?が必要。  
いっそ大雪町に変更したら。

伊藤 義廣 (北海道体験観光推進協議会 専務理事)

あれ？  
私ヨガインストラクターなのに  
いつのまにかディレクターと  
キャスティングやってる。

奥かおる (ヨガインストラクター)

大豆コーヒーで  
新たな出会いを開拓したい。

辰巳 裕亮 (農家)





## もしかしたら、 ものすごい場所にな るんじゃないか。

上川町長  
佐藤 芳治

チームラボキッズ株式会社代表  
松本 明耐

2019年、上川町に「大雪かみかわ スクモ」という新施設が誕生する。すでに廃校となっていた旧東雲小学校を改装し、人々が集える場所を作ろうという新プロジェクトが持ち上がったのだ。館内に入るコンテンツ制作のひとつを手掛けることになったのは、ウルトラテクノロジスト集団「チームラボ<sup>※</sup>」。

なぜ今、上川町にデジタルアートが必要なのか。

新たなチャレンジにかけるそれぞれの思いをトップ同士で語る。

※最新のテクノロジーを活用したシステムやデジタルコンテンツの開発を行う。アーティスト、プログラマー、エンジニア、CGアニメーター、数学者、建築家など、デジタル社会のさまざまな分野のスペシャリストから構成されているウルトラテクノロジスト集団。

—このタイミングは、運命みたいなもの。

佐藤町長(以下、佐藤)：上川町は層雲峡を中心とした観光の町なんですが、これだけじゃ町にもっと人を呼び込むことにはつながらない。町の魅力をアップさせて外から関心を持ってもらうためのひとつとして「大雪 森のガーデン」を作りましたが、まだまだ不十分。もっとこの町を元気にする、もっとインパクトのあることを…と考えている時に、たまたま縁があってチームラボの松本代表が講演に来てくださったんですね。チームラボさんが行っているものは、本当に衝撃的で！こういうものが地方にもあればPRになる、これを一部でもいいからやれないものだろうか考えたんです。そうしたらチームラボさんも「やってみようか！」と。

松本代表(以下、松本)：講演に呼んでいただいた時、雪深い絶景を見たくて有名な三國さんのレストランに行こうとしたんですが…去年の冬はやっていなかった(笑)。これはもう一回絶対に行かなくちゃ！と思ったんですが、そのためにはプロジェクトを何かやらなきゃいけないと。そしたらちょうどいい廃校があったんです。廃校って日本中に増えているけれど、ホテルにしたり、いろんないい活用をしている人が増えているじゃないですか。元々あった場所がまた地域のために開かれていくっていうのはすごくすてきなことだし、日本中でやるべきことだと思うので、このチャンスにご一緒させていただきました。

佐藤：地元への付加価値を高めるような新しい取り組みができないかと考えている最中でしたから、本当にいいタイミングです。運命みたいなものですね。

—継続的に何回も来てくれる場所に。

佐藤：チームラボさんの展示空間は、館内に入っても規制を受けることなく自由で。他の人と違う楽しみ方、触れ方がいろいろとあるじゃないですか。それがあ意味“無限”みたいなものを感じられて「うわあ…おもしろいな、これ！」って。だから、施設の中で迷子になるのもまたおもしろいんですよね。

松本：そうそう、その通り。

佐藤：体感して初めてわかることがたくさんあるなと感じましたね。

松本：チームラボはデジタルアートを使って教育プロジェクトをやっていて、それが「学ぶ！未来の遊園地」というプロジェクトなんです。全国のいろんな美術館で展示会をすることが多かったんですね。未来の教育で創造性とか共同で何かをやるのが大事だと僕らは信じているんですが、年に1回行くだけで「へえ～」で終わっちゃう。だから常設でしょっちゅう来て、創造的で共同的な体験を継続的に経験していくことで、よりその理解が深まっていくような場所を作りたいなとずっと思っていて。上川町だけでなく、旭川市くらいまでの距離感の人が「おもしろいワークショップもやっているし、そういう教育に子どもたちを触れさせたい」と思って、継続的に何回も来てくれる場所になったらいいなと思っています。

佐藤：そうですね。やりたいなと思っているもうひとつの理由は、北国の子どもたちは冬場に安心して遊べる場が少ないからなんです。地元で若いお母さんたちと話をすると出てくるのが「安心して自由に遊べて、

子どもたちの主体性や自主性を育める場所がない」ということ。子どもたちが自ら直接体験するデジタルアートによって自主性が芽生えていく、という感覚を体感できる場所が求められていると思います。それを体感できる世界が広がるって、ものすごい場所になるんじゃないかと僕は期待していますよ。それから、子どもたちが来ればお母さんを中心とした保護者も一緒に来ることになるので、交流の場としても広がっていけば非常におもしろい場所になっていくのかなと思っています。

—この先、何が出てくるかわからない。

松本：今回のプロジェクトは、やりながらどんどんバージョンアップしていく感じだと思いますね。「未来の遊園地」の中から一部を切り出して2回、3回と参加することで、より深く教育的な価値が高まっていく、という取り組みが初めてだから僕らもすごく期待していて。いろいろ発見したいし、問題とかも出てくると思うんですよ。「全然お客さん来ないじゃん！」とか「教育的な要素が深まっていかないじゃん！」とか。そういうのも含めて一緒に作っていただけだと思います。

佐藤：本当にその通りだと思いますよ。だって僕たちもわからないもん、この先どうなっていくか。

松本：そうですね。

佐藤：ましてや地方でやることでしょ。チャレンジですよ。これから進めていく中で、何が出てくるかわからない。しっかり連携してやりたいです。

松本：ぜひ！よろしくお願いします。





1

小さな町と大都会。

1,300キロの距離を味方につけたチャレンジを。

チームラボキッズ

地方を盛り上げたいと考えたとき、その方法は移住だけではない。東京にオフィスを構えるチームラボキッズが上川町の旧東雲小改装プロジェクトの一部に関わっているように、都会にしながら地方の活性化に注力するという働き方もあるだろう。今回のプロジェクトメンバーの1人、遠藤香さんは北海道美瑛市出身。東京で暮らしながら、さまざまな地方の仕事に携わっている。地方で育ったからこそ高まった想像力は今の仕事にも大いに生かされていると言い、「今手掛けているコンテンツも、幼い頃の私がそれを見て、どう感じて、どう遊んだらう?どんな未来を見るんだらう?って、すっごく想像して作り込んでいます」と話す。

また、東京にいてことで気付ける地方の魅力もあると言う。「その地方ごとにいろいろな特色があって、それを感じながら作るのが面白いです」。

外から見た町の魅力を町の人たちと共有し、新しい価値を生み出す。大都市と町のコラボレーションが面白い化学反応を引き起こすかもしれない。「東京に出てきて初めて、どこでも働けると思いました」という遠藤さんの言葉通り、インフラが整った今、やりたいことをやるのに働く場所は無関係なくなりつつあると言えそうだ。

今回の旧東雲小改装プロジェクトで、遠藤さんからチームラボキッズが目指すのは、上川町に地元の人たちが気軽に集まれる場所を作ること。チームラボキッズの作品コンセプトは、共同的な創造、「共創」。人と人の交流によって、新しい発想が生まれたり、1人では難しいことを実現できるようになる。他者と共同で創造することがあらゆる可能性を広げると信じているのだ。東京と1,300キロ以上の距離を超えて、町の可能性を広げるチャレンジがはじまっている。



2



3

1. チームで作品を作り上げるため、ミーティングは重要。遠方のメンバーとはテレビ会議で話をするこも。
2. 3. あそび! 天才プログラミング / Play! Programming for Geniuses 自分の描いた絵を、自分の創ったプログラムで動かして、遊びながらプログラミングの考えを学ぶ体験を上川町でできるようになる。

#### 【 チームラボキッズ 】

さまざまな分野のスペシャリストが集まったウルトラテクノロジスト集団の教育的プロジェクト「チームラボ 学ぶ! 未来の遊園地」を進行中。未来の社会には人間の創造性が大切だと考え、共同で創造的な「共創」の体験を楽しめるデジタルアート作品を世界に広めている。旧東雲小の改装時に導入する「あそび! 天才プログラミング」は、チームラボとして初めての常設展示となる。

**teamLab★**  
**学ぶ! 未来の遊園地**  
**teamLab★Future Park**



1

旨い酒を造るために、そこで働く人のことを考える。

北海道に戦後初誕生した酒蔵の挑戦。

上川大雪酒造

北海道に戦後初めて誕生した日本酒蔵、上川大雪酒造「緑丘蔵(りょつきゅうぐら)」。酒蔵という薄暗いイメージだが、緑丘蔵は窓が多く明るい。なんと麹室(作業場)にも窓があるのだ。薄暗い中で酒造りを行っている酒蔵が多い中、緑丘蔵が麹室に窓を作った理由は、町に人を呼ぶための蔵だからだ。衛生的かつ少ない人数でもやっていける酒蔵見学を考えた結果、窓の外から自由に見てもらうスタイルを考案。試行錯誤を繰り返し、酒造りに影響が出ない範囲で窓を作ることに成功した。

それから、蔵で働く人たちの休憩室にも大きな窓を作った。忙しい仕事の合間にほっと一息つける時間が、いい酒を生み出す活力になると考えたからだ。働く環境を整えるということも、実は町を盛り上げるための挑戦なのである。

上川大雪酒造の挑戦はそれだけでは終わらない。今度は、日本酒になじみのない人にも緑丘蔵を知ってもらおうと、カフェをオープンさせたのだ。カフェの名前は「緑丘茶房」。酒かすを使ったメニューが人気で、「大雪 森のガーデン」の敷地内に夏だけ登場する。

このカフェで働くのは、緑丘蔵でも働く地元の人たち。酒造りを行うのは10月~7月、冬が忙しさのピークで、夏の間に閑散期がでてくる。そこで、夏の間カフェを開くことによって、蔵で働く人たちが一年を通して働けるようにしたのである。通年雇用の難しさに悩む日本酒蔵も多い中、自然の流れに合わせて仕事を変えるという方法で課題をクリアした。

町に雇用が生まれ、町に人が定着する。上川大雪酒造の挑戦は、酒造りを超えて広がっている。



2



3

1. 寒冷・積雪地ならではの「かまくら雪取り」。まるやかで上質な味に仕上がるそう。
2. 「上川大雪」特別純米。穏やかな香りで、「飲まる酒※」として人気。
3. 一見すると酒蔵とは思えない外観。夜はライトアップされ、幻想的な雰囲気に。  
※飲まるとは、北海道弁でつい飲み込んでしまう意。

#### 【 上川大雪酒造 】

地元を支えられ、地域に根ざす「地方創生蔵」として2017年に誕生。上川町の天然水と北海道産の酒米のみを使った純米酒を造る。ギフトショップのオープンや、寒さを生かした「かまくら雪取り」など、常に新しい挑戦を行っている。





# KAMIKAWORK

## PROJECT®

### カミカワークって何？

What is KAMIKAWORK？

おもしろそうだからやる。  
それがカミカワーク。

北海道最高峰・大雪山の麓に広がる上川町。きれいな空気や水、四季折々の美しい景色、大雪山の恵みに育まれた環境の中で、新しい働き方を考えるのがカミカワークプロジェクトだ。それは新しい上川町の提案。大自然の中で自由に発想してチャレンジする人を町がサポートし、新たな視点で町と人が一緒に盛り上がりとうはじまった。

都会で働くように、大勢の中の1人ではない。自分が主体となって働き、町に影響を与えるのだ。それを実感できる喜びは、都会では味わうことのできないおもしろさだ。当然、満員電車での長時間通勤やノルマ達成のための残業はない。仕事の進め方も自分で決められるから、家族で食卓を囲んだり、季節の移り変わりを感じたり。時間の使い方、生き方は自分次第なのだ。常に自分が主体だから、やりたいことはほとんど

チャレンジできる。おもしろいことを追求していくという働き方は、仕事とプライベートの境目を曖昧にする。その曖昧さが、自分を成長させ、町の活性化にもつながるのだ。

大雪山は宝の山である。

空気、水、雪、花…都会では少なくなった豊かな自然が、当たり前のもので存在する上川町。この恩恵を生かしたビジネスは、すでにあちこちで生まれている。

例えば上川大雪酒造は、大雪山の湧き水と北海道の酒米で純北海道産の日本酒を造った。層雲峡ホステルは、世界中の山好きが集まる交流の場所にしたいと作られた宿だ。

新たなものを作り出す、既存のものを新たな切り口で見せる。スタイルは違えど、どちらも大雪山の恵みを受けて、新しい価値を生み出したということに変わりはない。これを目当てに上川町を訪れた人も少なく

ないだろう。地元の人が気づけない当たり前の中に、おいしいビジネスチャンスが隠れているのだ。

素質があるかより、  
やりたいかどうか。

カミカワークに挑戦するのに武器になるもの。それは、好奇心が旺盛なことだ。あらゆることに興味を持ってチャレンジしてみることはカミカワークの基本。以前にチャレンジして失敗してしまった人も大歓迎だ。それから、都会の良さを知っていること。スピード感や情報量、都会のことを知っているからこそひらめきは上川町にとって大きなプラスになる。最後に、山と自然が好きなこと。“好き”は何より大きなパワーになるから、上川町で働く人にとっては大きな武器だ。

自分のために町のために、町のために自分のためになるカミカワーク。センスとか素質とか、そんなことより「やりたい!」という強い思いの方がよっぽど大切。だから上川町は心から歓迎する。おもしろいことを企んでいる人を。



**CHECK!**

より詳しい上川町の移住支援情報は  
KAMIKAWORKホームページで公開中!

[kamikawork.jp](http://kamikawork.jp)





DAISETSU

- SNOW -

GLAMPING

EVENT REPORT

マイナス14.8℃。  
極寒の上川町の冬に、極上の楽しみ方を。

2018年4月に「観光振興および地域活性化に関する包括連携協定」を締結した

上川町、上川大雪酒造株式会社、株式会社スノーピークの三者が、

上川町の新たな冬の楽しみ方を開拓するモニタリングイベント

「DAISETSU-SNOW-GLAMPING」を開催。

イベントのアクティビティパートを担当するのは

地方創生事業に力を入れる老舗アウトドアメーカー「スノーピーク」。

彼らが提案する上川町の冬の新たな遊び方、

そしてまちづくりへの思いとは？

撮影協力＝メトス、マッシングワークス





寒さのピークを迎える1月下旬の上川町。大雪山を間近に望む「大雪 森のガーデン」をメイン会場に「DAISETSU-SNOW-GLAMPING」が開催された。「野遊びのプロの目線から、上川町のアウトドアの可能性を高めたい」というのがスノーピークの思い。アウトドア雑誌の編集者などの野外アクティビティの有識者へ、日本でも有数の寒さを誇る上川町の冬の新たな楽しみ方を提案することが今回のイベントの目的だ。

今回スノーピークが提案するアクティビティコンテンツでは、昼と夜それぞれ違ったテイストで上川町の自然を楽しめる。アクティブな冬を楽しむ昼の「スノーアクティビティ体験」では、北海道の広大な雪原を駆け抜ける「犬ぞり」や「ラフティングボート」で冬らしさを感じ、「テントサウナ」で外気温との差を感じながら冷えた体を温める。今までの上川町にはなかった、

冬の外遊びを楽しめるコンテンツだ。

夜はメインイベント、星空の下での「焚火バー」。アクティブに楽しんだ昼とは様変わりし、ゆったりと焚火を囲み、お酒を飲みながら語り合う、自然の中でのコミュニケーションを楽しむ時間だ。マイナス14.8℃。上川町の夜は深く冷え込むが、火を眺めているだけで不思議と温かい気持ちに。もちろんテントサウナも用意され、中からは今日が初対面にもかかわらず、すっかり打ち解けた様子のゲストたちの談笑が聞こえる。職業も年齢もバラバラ。そんな普段は関わる機会がない人々が大自然の中で心を開き、楽しむ姿が見られた。

自分たちが感じた魅力をより多くの人へ伝えるため、スノーピークは地域に代わり情報発信のきっかけを生み出す。そのひとつが、今回のような

土地の魅力を生かすアウトドアイベントの開発だ。犬ぞりやテントサウナ、星空の下での焚火バー。自ら足を運び感じた、上川町の冬の特色を最大限に生かせるコンテンツを考え、イベントを実施する。そうすることでイベントを体験したゲストに「上川町の自然はすごい」という情報を拡散してもらうことができる。さらに、イベントの開催にあたり、スノーピークがコンテンツを提供する会社への協力を呼びかけることで、その企業が上川町でビジネスをはじめきっかけにつながることもある。イベントの開発は町としての魅力の発信だけではなく、上川町内での新しい働き方にも貢献できるのだ。

イベントは今後もバージョンアップを続けながら開催される。上川町の冬に、今までにない楽しみ方が広がるとともに、新たなビジネスの可能性も生まれそうだ。

1. フィンランド製のテントサウナ。初めて体験するゲストも多く、注目を集めた。
2. サウナでは水だけではなく、テント周辺の雪も活用。冬ならではの光景。
3. 参加者が囲む焚火の中では、上川町の白樺が音を立てて燃えていた。
4. 犬ぞりで冷えた体を、スノーピークのギアで淹れたコーヒーが温める。
5. キャンプサイトは大雪原のど真ん中。会場までは圧雪車で向かう。
6. 日本遺産に認定された上川アイヌの古式舞踊を見ながらバーを楽しむ。



【スノーピーク】  
新潟県三条市に本社を置く老舗アウトドアメーカー。「人生に、野遊びを。」のコーポレートメッセージのもと、アウトドアの知見をいかしたイベントの企画、提案を通して上川町のまちづくりをサポートする。



# 上川町は ポテンシャルも 大雪山級

大雪山の麓で新しい働き方を。  
 そう思うなら上川町の可能性について知っておきたい。  
 ピンチと見るか、チャンスと見るか。それはあなた次第だ。

飲食店の  
チェーン店数

0

「第一号店」をこの手で。

都会では当たり前のカフェやレストランの  
 チェーン店も、上川町では当たり前じゃない。  
 気軽に立ち寄れるコーヒースタンドや家族で  
 行けるカジュアルなレストラン…  
 大雪山の麓で、人が集まる「第一号店」をオー  
 プンさせるのはあなたかもしれない。

オリンピック  
選手輩出

3人

世界と戦う人を育てる  
土壌がある。

人口4,000人ほどの小さな町には、ワールド  
 ワイドな挑戦ができるパワーが詰まっている。  
 おいしい食べ物にあたたかい町の人、心身  
 を支えてくれる心強さは何よりも大きな力に  
 なる。

最低気温が最高の資源に。

湿気を含まない空気に包まれる冬の大雪山に  
 は、日本で最もきれいな雪が降ると言われてい  
 る。サラサラのパウダースノーや、きれいな雪  
 解け水が育むおいしい野菜は大きな魅力と  
 なって注目を集める。  
 寒さは人を呼ぶエネルギーにも変わるんだ。

過去最低気温

-31℃

※出典：平成27年3月 上川町地域防災計画

層雲峡温泉を訪れる年間観光客数

約 2,000,000人

※出典：北海道上川総合振興局 平成29年度 上川管内観光入込客数調査報告書

つまり、チャンスだらけ。

自然や温泉を求めて、国内外からひっきり  
 なしに観光客が訪れる。  
 単純計算で1日約5,500人。あなたのアイデ  
 アが世界中に広がる可能性があるんだ。



待機児童数

0人

安心感から生まれる  
大胆なチャレンジ。

大雪山の麓というと、どんなに不便な場所  
 かと思うけれど、上川駅にはJRの特急が停  
 まる。札幌市や旭川市からもJR一本。仕事  
 面でも生活面でも、いざというときの安心  
 感があるから挑戦を続けられる。

JR特急で旭川駅から

約 45分



ウェルカム！  
ババママワーカー。

世間を騒がせている待機児童問題も、ここで  
 はどこ吹く風。大自然の中でイキイキと働くバ  
 バママに、ノビノビ育つ子どもたち。  
 子育てでも仕事も、両方諦めることなく楽しめ  
 るってすてき！

陸上で

日本

広い国立公園

可能性を掘り起こせ！

陸上で日本一の広さを誇る大雪山国立  
 公園には、可能性も無限に広がっている。  
 新しい魅力として生かせる資源が、まだまだ  
 眠っているはずだ。  
 あなたの手で新たな可能性を掘り起こそう！





好きを仕事に、  
仕事を好きに。

紺野 龍太  
彫刻家

#### LIFE WORKERのやりたい10のこと

1. カナダ先住民から受け継いだ木彫りの技術・伝統的なデザイン・部族の物語を大切にしたい。創作意欲の源です。
2. 1を元に新しい作品を生み出したい。上川町の木で自分にはできないものを作りたいです。
3. トーテムポールのような大きな彫刻作品に挑戦したい。
4. カナダ先住民の生き方を学びたい。自然にあるもので持続可能な生活をしてきた生き方に、生きる術を学べると思うから。
5. 鶏を飼って卵を取りたい。安全な食べ物をストックしたいから。
6. ソーラーパネルを手に入れたい。電気も自給したいから。
7. 敷地内に畑があり、川が流れている場所に住みたい。上川町が理想の場所でした。
8. 自分の欲深さを手放したい。
9. 子どもの成長を楽しみにしたい。
10. 木を彫ることをLIFEWORKEにしたい。今まで自分が学んできたことは面を彫るためだったと直感で思ったから。



Ryota Konno／1976年生まれ。茨城県取手市出身。木に関わる仕事を志し、ログハウス建築を学びにカナダへ。先住民の彫刻家と出会い、以来カナダ先住民に伝わる面を彫る。2016年上川町にベースを移す。

好きを仕事に、  
仕事を好きに。

辰巳 裕亮  
農家

#### LIFE WORKERのやりたい10のこと

1. 「かみかわ大豆コーヒー」から生まれたご縁に感謝し、新たな出会いを開拓していきたい。
2. 大豆コーヒーと一緒に、上川町の農業やロケーションの素晴らしさを発信するプロモーションムービーを作りたい。
3. 上川町の良さがもっと伝わるパッケージにしていきたい。
4. 「大豆コーヒー農家」として、農業スキルと大豆コーヒー事業の収益性を高めていきたい！
5. 地元農業の将来にわたるマネジメントに貢献する存在でありたい。
6. 真に誰かのためになる生き方を追求し続けたい。
7. これからも大雪山の絶景に囲まれながら働き続けたい。
8. 大雪山の山々へ感謝の気持ちを忘れず、持続可能な農業を追求したい。
9. 子どもたちが「上川町で生まれ育ってよかった」と思えるように、大雪山の大自然を子どもたちと体験し共有していきたい。一緒に登山をしたり、氷瀑まつりを楽しんだり。
10. 「一日一灯」。毎日誰かの心に灯をともしせるようなナイスガイでありたい！



Hiroaki Tatsumi／1987年生まれ。北海道上川町出身。実家を継ぐために上川町へ帰郷。農業に従事する傍ら、上川町活性化のプロジェクトを仲間と立ち上げ、大豆コーヒーの販売をはじめとする町おこしに取り組む。



|         |            |
|---------|------------|
| 好きを仕事に、 | ニール・ハートマン  |
| 仕事を好きに。 | 映像作家・カメラマン |

#### LIFE WORKERのやりたい10のこと

1. 自分発信の映像を、製作したい。自分らしく作品を作りたいんだ。
2. YouTuberになりたい。他人のフィルターを通さずファンとつながれるメディアって最高！
3. 自然相手にはフレキシブルでいたい。自然は気まぐれだからね。
4. 楽しくて笑わせられる作品を作りたい。暗いニュースが多い世の中だから。
5. 自由な時間を生み出したい。
6. 大雪山の黒岳に仲間を連れていきたい。大雪山には『CAR DANCHI』の撮影でもよく行くんだ。特に黒岳は北向きの山で雪が長持ちするんだよね。
7. GOODなカメラを手に入れたい。新しくハイエンドなギア大好き。
8. 地球温暖化をくい止めたい。愛する雪がなくなったら困る！
9. ワンマンショーをやりたい。MC、映像、音楽…今までの経験をひとつのエンターテインメントにしてみたい。
10. 仕事を好きでいたい。ONもOFFも楽しんでいたんだ。



Neil Hartmann／1972年生まれ。カリフォルニア・サンディエゴ出身。スノーボード番組『ノーマターボード』のMCをきっかけに、スノーボードの動画撮影を始める。代表作はプロライダーを追ったドキュメント作品『CAR DANCHI』。

|         |      |
|---------|------|
| 好きを仕事に、 | 志水陽平 |
| 仕事を好きに。 | 経営者  |

#### LIFE WORKERのやりたい10のこと

1. 層雲峡を山岳リゾートにしたい。現状から脱しないと！
2. ボルダリング施設を作りたい。雨の日の山に別の楽しみを。
3. 大雪山の醍醐味は縦走。気軽にできる仕組みを作りたい。上川町（黒岳側）で借りて東川町（旭岳側）で返せる山道具のレンタルとか。
4. 登山を親しみやすくしたい。それぞれの人にあった「山歩き」。
5. 山好きの交流の場を作りたい。今日の一日を話せる人がいる宿に。朝起きてメッセージが増えていい一日が送れます。
6. トーク力を手に入れたい。親しみやすい自然ガイドになって、山を案内したい。
7. 意欲ある若い人と町を盛り上げたい。調整役は得意なので、地域プロデューサーみたいのができたら。
8. オーナーとして魅力的な職場を作りたい。成長できる場に。
9. いるだけで場がなごむような人になりたい。適当だけど好かれる人に憧れます。
10. 大雪山へ登山をしたことのない友人を連れていきたい。山岳景色の雄大さに対するアクセス、山の登りやすさは日本一！



Yohei Shimizu／1990年生まれ。北海道旭川市出身。公務員から転身、旅好きの山好きが高じて2018年「層雲峡ホステル」をOPEN。大雪山登山の拠点としてパワーアップを目指す。夏は上川町、冬は旭川市という2拠点生活。



# 言い出したら止まらない!? 異ジャンルのプロが 本音で語る上川町の未来。

町の総面積の約94%が森林、もちろん都会のような利便性はない。

しかしなぜ、上川町で新たなビジネスが生まれ続けるのか？

枠にとらわれないアイデアで上川町のまちづくりをサポートするプロフェッショナルサポーターたちが、

上川町のリアルや地方のこれからを語りまくる！ジャンルもスタイルもバラバラ。

そんな普段は交わることのない有識者たちの本音トークが生む化学反応は、

あなたと上川町に革命を起こす大ヒントになるかもしれない!?

プロフェッショナルサポーターとは？

上川町のまちづくりを支える、上川町公認のサポーター。

これまでの取り組みの知見を生かしながら上川町のまちづくりや移住者の就業・起業支援に携わる。

## 龍崎翔子

(L&G GLOBAL BUSINESS, Inc. 代表／ホテルプロデューサー)  
2015年にL&G社を設立。日本国内の数々のホテルをプロデューズ運営。2018年5月に北海道の釧路で廃業した温泉旅館を再生した「HOTEL KUMO」をオープン。

## 村上萌

(株式会社ガルテン 代表／ライフスタイルプロデューサー)  
「次の週末に叶えたい理想の生活をコンセプトに季節の楽しみと小さな工夫を提案するコミュニティメディアNEXTWEEKEND」の代表。ウェブサイトの運営をはじめ、運動した雑誌の刊行や週末イベント、ECストアの運営、その他空間や商品などのプロデュースを手掛ける。

## 遠藤香

(チームラボキッズ カタリスト)  
2013年11月にスタートしたチームラボが進める教育プロジェクト「チームラボ学」未来の遊園地のデザイン・広報・カタリストとして活動。さまざまなワークショップの開発をはじめとし、全国各地で子ども向けイベントの企画・普及に携わる。

## アサイアサミ

(コホレジャパン株式会社／編集者)  
出版社などで編集、ライターを経験。2012年岡山県瀬戸内市へ家族三人で移住し地域の魅力を発信する会社「コホレジャパン」を夫婦で起業。広告会社を営みながら、移住情報誌「TRANS」の編集も手掛ける。

## 奥かおる

(株式会社ワイズ・ワン 代表／ヨガインストラクター)  
司会業やラジオパーソナリティなど、さまざまなフィールドで活躍しながらヨガインストラクターとして活動。北海道の自然に寄り添いながら、健康やかに笑顔でいられるまちづくりをヨガを通して叶えたいとの思いから北海道内各地のイベントでヨガの楽しさを伝える。

## 北原淳

(徳出版社／コンテンツプロデューサー)  
世の中に豊かなライフスタイルを提案・提供する出版社にて、さまざまなコンテンツを組み合わせたイベントやプロモーションを企画・運営している。地域活性化事業など市町村とのコラボの経験も豊富。

## 伊藤義廣

(一般社団法人北海道体験観光推進協議会 専務理事)  
地域資源を観光へ活用し、地域の活性化を目指す事業に携わる。さらにその地域ならではの体験ができるプログラムの提案も行う。

## 塚原敏夫

(上川大雪酒造株式会社 代表取締役)  
日本酒の製造を休止していた三重県の酒造会社を上川町に移転し、上川大雪酒造株式会社を設立。北海道産米にこだわる小仕込み・高品質の酒造りを行い、「6次産業化地方創生ビジネス」として地域活性化への貢献を目指す。





2018年秋からはじまった「カミカワークプロジェクト」により、

まちづくりのターニングポイントを迎えた上川町。

新たなビジネスが生まれはじめている今、さらに町を盛り上げるために必要なものとはなにか。

観光や定住、働き方の面から上川町の魅力や可能性について掘り下げる。

司会：編集部

ー今日はプロフェッショナルサポーターとして塚原さん、伊藤さん、北原さんに。そして観光事業の有識者として瀬川さんにお集まりいただきました。皆さまが感じている上川町の魅力を教えていただけますか？

塚原敏夫さん(以下、塚原)：どこもやっていないことにチャレンジしていける町だということです。上川大雪酒造のあり方もそれを目指しています。

伊藤義廣さん(以下、伊藤)：上川町は大雪山へのゲートウェイだろうなと。しかし実際、観光客の受け入れ制度は果たしてどうなんだろうなと。まだまだ伸びる可能性があると思っています。

北原淳さん(以下、北原)：やはり圧倒的な大自然だと思いますね。町の観光スポットになっている「大雪 森のガーデン」も、こんな小さな町が作りあげたのはすごいなと思っています。まちづくりに積極的な人の動きも大きな魅力のひとつだと思います。

瀬川耕市さん(以下、瀬川)：「大雪山ツアーズ」の瀬川です。上川町の観光を盛り上げています。上川町の魅力といえば、やはり大雪山のさまざまな恩恵を受けられることです。かつては大雪山だけで観光客が100万人来ていたという話も聞いています。

人づくりが観光の質を上げる。

ーカミカワークのコンセプトは「仕事×上川町」。上川町の魅力を、特に若い人たちがこの町で暮らしていくにあたり、どう仕事に転換していけるのか。また、町にはどんな課題や越えなければいけない壁があると思いますか？

瀬川：観光の面からの課題は、サービスの質ですね。たくさん観光客に来てもらっても、サービスの質が伴わなければその後リピートしてもらえない。質を上げるために必要なのはガイドの育成だと思います。

ー今カミカワークでも観光ガイドも担うアウトドアプロデューサーを募集しています。観光という視点で最大の資産である大雪山を生かすための人材不足が大きな課題のひとつですね。

瀬川：ありのままを説明するだけのガイドなら上川町にはすでにたくさんいる。例えばバードウォッチングガイドが上川町の歴史や、町の成り立ちなどの話ができるなど、地域の魅力を深く伝えることが、この町の観光の質を上げることにつながると思います。

ー北海道内のガイド事情を知っている伊藤さんの視点では、今上川町に足りていないものはなんだと思いますか？

伊藤：私たちとしては山岳ガイドだけではなく自然ガイドにも領域を広げた方がよいのではないかと。ライトに楽しむ人に向けて、上川町の自然を語れる人が増えてもいいと思います。

この町ならではの文化を深掘りして伝える。

ー本格的な山好きではなく、カジュアルな人も自然を楽しめるイベント、という視点で働く人間を増やしたり、事業化するアイデアがあればお願いします。

北原：昨日と今日にかけて上川町で開催された「DAISETSU-SNOW-GLAMPING」のコンテンツだったアイヌ舞踊のパフォーマンスに若い女性が

すごい興味を持っていて。それはアイヌ衣装のデザインや、アイヌ語の意味を知りたいという意見だったんです。

ーなるほど。

北原：文化や背景を深く知りたかったという言葉がとて多くて驚きました。その視点で言う、この町ならではの文化を深掘りして表現する作業・メニューを作ることが必要だと感じましたね。

地域資源 × 町の支援で冬の課題を打破せよ。

ー上川町の課題は、冬に仕事が見つからないということ。冬の期間のビジネスアイデアや、その後の定住促進につながる事例はありますか？

伊藤：いい事例としては北海道鹿追町のしかりべつ湖コタンですね。上川町と同じく冬場の職が問題になった時、町の支援を活用してスウェーデンのユツカスヤルピという村にあるアイスホテルを参考にイグルー(圧雪ブロックを使った雪のシェルター)を作ったんです。

ーとてもフォトジェニックな場所ですよ。いろいろな雑誌でも紹介されていました。

伊藤：そして夏場に働きに来ていた若いガイドの住居や給料などのサポートを町が整えて、彼らに冬の期間にも来てもらっていたら、3〜4人だったガイドが15人まで増えた。つまり、地域資源から職を生み出すアイデアも必要ですが、定住してもらうための町の支援をしっかり構築することも必要だということですね。

上川町を導く、次の一手を探れ。

そのポテンシャルが、上川町に来る価値に。

ー来年度の夏や冬に向けて、動き出しているプロジェクトやアイデアはありますか？

上川町役場：廃校を利用して「チームラボ」の教育プログラム体験やカフェを楽しめる施設ができるのがひとつ。それと町内のキャンプ場を順次リニューアルして、交流人口を増やすためのキャンプ場を新しく作ろうとしています。

伊藤：キャンプ場も、例えば「おやじだけのキャンプで大雪酒造の酒蔵の酒を飲み干そう」とか。上川町らしいテーマを決めてやるのが大切だと思います。

北原：それを担うのがアウトドアプロデューサーですね。

塚原：あとは、上川町の名物のニジマスを釣ってきて焼いて食べられるとか。ここでしかできないことを提供できたら上川町に来る価値になりますよね。上川大雪酒造では、敷地内に屋根付きのテラスを作りました。そこに地元の名産の豚肉や朝採れの野菜を並べて、その場で焼いて食べてもらいたいと思ったからです。

ーそれはおもしろいですね。

塚原：そうしたら観光客だけでなく町民のにぎわいも生まれるかと。「あそこでおもしろいことをするよ」と周りから言われるようになるのが大切ですね。

最初の一步は「Think Locally Act Locally」から。

ー最後に、上川町に興味を持っている人へエールや一言をお願いします。

瀬川：会社が2017年4月にできたばかりなので、皆さんと一緒に上川町を盛り上げていければと思います。

北原：世の中にあるさまざまなコンテンツで、上川町に生かせるコンテンツがあればどんどん導入して、まちづくりのヒントになればいいと思っています。私も自分のポテンシャルの中で活用できるものはすべて投入していきたいです。

伊藤：エコロジー用語で「Think Globally Act Locally」という地球規模で考え、地元で動くという言葉があります。これからの時代のまちづくりは「Think Locally Act Locally」で、まずは今の町の規模でできることから考えて勝負していくのが重要ではないでしょうか。

塚原：小さなお店や企業でも他にはない特色があると強いですよ。例えば温泉も強烈に硫黄が強いとか、ひとつ特色があると小さなところでもつぶれない。この町もそういうものを目指していくのだろうなと思います。上川町は小さな自治体ですから、規模は小さくても他にはない尖ったことをやって、どこにも負けない町にしていきたいなと思っています。

エピソードはまだまだ盛りだくさん！ WEBでチェック！





今ビジネスシーンで活躍する女性たちが注目する「地方」。

そこには女性が働きやすい環境があるのだろうか。

さまざまな分野で活躍する女性プロフェッショナルサポーターたちが考える、  
地方が女性に選ばれる理由とその働き方とは？

司会：奥かおるさん

奥かおるさん(以下、奥)：今日はさまざまなジャンルで活躍されている皆さまの活動分野から、「女性×地方」の魅力や可能性についてお話をさせていただきます。まずは、それぞれ上川町でどんな活躍をしているのかをお伺いしたいと思います。

アサイアサミさん(以下、アサイ)：昨年の秋に下北沢でカミカワークのイベントがありまして。トークイベントに登壇して、岡山県への移住経験をお話しさせていただきました。

村上萌さん(以下、村上)：私自身は元々北海道には縁もゆかりもなく。サッカー選手の夫が北海道コンサドール札幌に移籍するタイミングで一緒に移住しました。北海道の仕事をいっぱいいたいな、と思っている時に上川町の役場の方から「人口も定住者も減って困っています」とご相談いただいて。そこでNEXTWEEKENDで上川町の魅力を表現する冊子を作りましょう、と小さい16ページの冊子を作らせていただきました。

遠藤香さん(以下、遠藤)：お付き合い自体は2018年の3月に上川町の講演会に参加させていただいてから。昨年、廃校をリノベーションした施設にチームラボの子ども向けコンテンツを入れたいとお話がありまして。そのプロジェクトの担当をしています。

龍崎翔子さん(以下、龍崎)：2017年頃に、上川町の層雲峡温泉という温泉街に元々建っていた温泉旅館をリノベーションして「HOTEL KUMOI」という新しいホテルを作りました。今はそのホテルを運営しています。

奥：私はヨガのインストラクターになってから、上川町役場の方から「大雪 森のガーデンのイベントで

ガーデンヨガをやりたいんです」と声をかけていただいたのが最初で。気が付いたら司会もやるし、今日もこうやって進行もやっているし。観光PR動画のキャスティングだったりとか動画の内容を考えると、結構幅広く一緒にさせていただいています。

**知らない自分を、地方で知った。**

奥：地方で仕事をするうえでの苦労や、逆に地方だからこそ見えてきた新しい可能性は何かありますか？

村上：東京にいた時は24時間ずっと仕事のことを考えていて。それが普通なのかと思っていて、止まるタイミングがわからなかった。その中で北海道と東京の2拠点生活をするようになって。物理的に今までのスタイルで仕事ができなくなった時に、人に任せるにはどうしたらいいかを考えられるようになったし、都会と地方、どちらのいいところも見られるようになりました。

奥：アサイさんはどうですか。岡山県を拠点にしていろいろなことをされてるなと思って。

アサイ：印刷所も出版社も8割が東京にあるので、移住した時にもう編集の仕事はできないと思っていました。でも気が付いたら「東京で編集をやっていたらしい」という噂が急速に広まって、「地方誌で書けませんか？」と言われて、「おもしろそうだし書きます！」って答えたらどんどん仕事が入ってきて。気が付いたらFM岡山でラジオディレクターをやっていました。

奥：今まで東京では「私の天職はこれなんだ！」と思っていたけど、それだけじゃないって気付いたんじゃないですか？

アサイ：そう！私の可能性が広がりました。地方は

人が少ない分いろんなことをやらせてくれます。東京での経験を生かしてほしいって。それがおもしろいから「未経験なんで無理です」と断らずに「友達作りたいんでやります！」って言ってやっていたのがよかったのかなと思います。

龍崎：地方って余白がすごく多いので。東京でやりつくされたことも、地方だったらゼロベースで取り組むことができますし。しかも女性でおもしろいことやろうとしている人がいるよっていうのは、すぐ噂になるので可能性が広がりやすい。やりたいことがある方は、地方で挑戦するのがチャンスだと思いますね。

**元気な町は、女性が元気。**

奥：遠藤さんはお仕事でいろいろなところに行かれていますが、印象に残っている町はありますか。

遠藤：最近移住のプロジェクトが多くていろいろな国や地域に行くんですけど。印象に残ったのは、女の人が元気な国とか場所とかですね。

奥：東南アジアとか元気ですね。

遠藤：元気ですね。あとは大阪とかいい例です。大阪のおばちゃんとか元気ですもんね。田舎に行けば行くほど女性はすごく元気な印象です。

村上：私は長野県の川上村で3年ほど仕事をしていて。その村の女性はとにかく自信がなくて。なぜかという、日本一のレタスの産地で世帯収入が高いから「嫁いだ人は家に入れ！」という風習で、お嫁さんは名前で呼ばれるよりも「〇〇家の嫁」として扱われてしまうんです。ネックレスを着けて外に出るだけで「遊んでる」とか言われたり。

奥：今の時代そういうところがまだあるんですね。

村上：そうなんです。なんとか自信を持ってほしくて。その中で、お茶と呼ばれる文化があるからいつもケーキを焼いているとか、花屋がないから自分で花を育てているとか。何もない環境ならではの彼女らの工夫があったので、それを発信するプロジェクトをやりました。それで起業をした人もいて。女性が元気なところって女性が自信を持っていますよね。

**町が生み出す、働くという生きがい。**

奥：結婚して専業主婦になるだけじゃなく、その町でどういう風に働くか。今回それが大きなテーマになると思います。私は上川町に移住している人の中ですてきだなと思ったのはガーデナーの皆さん。「大雪 森のガーデン」というガーデンができてから全国からさまざまな人が移住してきているんです。

アサイ：移住につながっているのは素晴らしいですね！

奥：その方々に上川町の魅力はなんですか？と聞くと「私はこのガーデンのために来たから、魅力を聞かれたらこのガーデンです」と。この上川町でガーデンを育てていくのが楽しいし生きがいを感じているという。そんな場所を作った上川町ってすごいなと思います。

**受け身ではなく、自ら答えを作るくらみを。**

奥：最後に、今後上川町への移住や新たな挑戦を考えている女性に向けてメッセージをお願いします。

アサイ：価値観変えたりとか生き方変えたいと思ったら「行ったらええがな」ってことですかね。みんないいね！って思われることをしたいって思っているし、

いいね！って思うことにお金を払う時代だと思います。そんなソーシャルグッドなことや、自分がやりたいと思うことが実現できる舞台は上川町にあるなと思っていて。それは上川町に余白があるから。可能性がある町だと思うのでぜひ挑戦してほしいです。

村上：今までの自分をどう生かせるか、私はテーマを持って移住してほしいと思います。会社に入る時と一緒になんですけど、自分の持つ能力を上川町とどう組み合わせると役に立てるのかをたくらんで来てほしいです。上川町に答えを求めるのではなく、自分がどう答えを作るのかが大切ですね。

遠藤：上川町っていろいろなことをやってるんだ！とすごくびっくりして。田舎の移住ってドロップアウトした人が来るイメージがあったんですけど、そのイメージが変わりました。上川町の知名度はまだまだ低いかもしれないけれど、今注目されはじめている場所なので、目立ちたがりの人が来て、移住してリーダーになって一緒に盛り上げてくれたらと思います。

龍崎：ぜひ上川町で挑戦してほしいです。今は情報や物流も発達していて、地方暮らしがデメリットになる時代でもないし。むしろ上川町は移住者のための施策が充実しているし、非常にオープンマインドな地域ですごくいい雰囲気が出ているノリが若い町なので、おもしろいことをしている人を積極的に応援してくれますしね。上川町でおもしろいことをする人が増えたらいいなと思います。

奥：これからの上川町の未来も楽しみです、今町に住んでいる若い世代の方たちもこれからの上川町を作ることに力を入れていると思いますので、ぜひその一員に皆さまにもなっていただきたいです。

デキる女が地方を選ぶワケ。

エピソードはまだまだ盛りだくさん！ WEBでチェック！

※龍崎さんはオンラインで対談に参加、後日収録したインタビューを掲載しております。





# 移住支援活用LIFE

上川町で新しい働き方を実現するなら、移住支援を活用するのも近道だ。  
もしも上川町の支援を使ったら、あなたの人生と仕事はどう変わる！？

## CHECK!

より詳しい上川町の移住支援情報は  
KAMIKAWORKホームページで公開中！

[kamikawork.jp](http://kamikawork.jp)

|                                                                |                                                                        |                                                                     |                                                                                            |                                                                                                |                                                                                       |
|----------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 仕事・暮らし                                                         | 仕事・暮らし                                                                 | 仕事・暮らし                                                              | 子育て・教育                                                                                     | 子育て・教育                                                                                         | 子育て・教育                                                                                |
| 就農支援                                                           | 起業支援                                                                   | 空き家改修支援                                                             | 給食費無料                                                                                      | 待機児童ゼロ                                                                                         | 芸術・文化に関する生涯学習サポート                                                                     |
| 最初の一步が<br>軽くなる                                                 | その意欲が<br>資金に変わる                                                        | 住まいを<br>リノベーションできる                                                  | エンゲル係数が<br>下がる                                                                             | 保育所探しが<br>ラクになる                                                                                | インプットの<br>機会が増える                                                                      |
| 北海道最高峰の麓で農業を。そんな志を持つ人をサポート。農業経営を考える人へ奨励金の提供、農業法人などの情報提供を行っている。 | 日本最大の山岳公園「大雪山国立公園」の玄関口・上川町。年間200万人が訪れるビジネスチャンスを生かし、お店を開業する人へ援助している。    | 家を整えることは、働き方を整えることでもある。だから上川町では空き家利用の際に改修費用を助成。自分の好きなようにリノベーションできる。 | 少人数ならではの密な授業、自然とのふれあい、地域との交流。毎日いっぱい学んで、遊んでいればおなかもすく。だから、小学生・中学生は全員給食が無料。育ち盛りの家族にうれしいサポートだ。 | 働きたくても保育所に空きがない。そんな心配も、上川町では必要ない。待機児童はほぼゼロ。保育所・幼稚園の利用者負担も国の基準より低額に設定。子どもが生まれても働きたい。そんな思いにこたえる。 | 良質なアウトプットのためにはインプットの機会が必要だ。上川町では公民館講座や文化公演の鑑賞や白寿大学などの学習機会がたくさん。思いがけないアイデアが生まれるかもしれない。 |
| 新規就農者等誘致事業：新規で農業経営を始める際、最大270万円補助。                             | 産業振興事業：店舗等の新設・増改築を行う際に最大300万円補助。                                       | 上川町空き家改修支援事業補助金：空き家バンク登録の空き家を改修する際、最大80万円補助。                        |                                                                                            |                                                                                                |                                                                                       |
| 介護・福祉                                                          | 介護・福祉                                                                  | 介護・福祉                                                               | 医療・保健                                                                                      | 医療・保健                                                                                          | 医療・保健                                                                                 |
| まちなかサロン「きてみんか」                                                 | 高齢者向け屋根雪下ろし支援                                                          | 障がい者送り迎えサービス                                                        | 予防接種の実施                                                                                    | 上川医療センター・家庭医                                                                                   | 子どもの医療費無料                                                                             |
| 地域は<br>みんなで作る                                                  | 冬の悩みに<br>埋もれない                                                         | 地方に住む<br>ハンデが減る                                                     | 予防に<br>力を入れる                                                                               | 病気がなくても<br>診てもらえる                                                                              | 医療費は<br>大人だけ                                                                          |
| 上川町では高齢者が地域の人たちの交流を深められる場を設けている。助け合いを育む場所作りを積極的に行っている。         | 美しいパウダースノーは、時に大雪となって住民に降りかかる。だから“雪投げ”を高齢者向けサービスとして実施。地域交流のきっかけにもなっている。 | 障がい者に、生きがいを。そんな思いから障がい福祉サービスも充実。送り迎えサービスなど、希望に合わせた支援を受けられる。         | ビジネスにも健康維持にも欠かせない危機管理。病気の予防に力を入れる上川町では、予防接種や検診の実施を推奨。費用の補助も積極的に行っている。                      | 新しい働き方も、体が資本。上川町では「家庭医」という総合診療医が特定疾患から体調管理までオールマイティに対応。医療が地域の挑戦を支える。                           | 育ち盛りの子どもがいる家庭なら、医療費はなるべく抑えたい。だから子どもの医療費を全額助成。子どものケガも、親の負担もどちらも軽くしたい上川町だ。              |
| まちなかサロン「きてみんか」<br>上川町南町1051 TEL:01658-2-1144                   | 高齢介護・福祉サービス：福祉バス運行、ホームヘルパー派遣、外出支援、屋根雪下ろし、長寿祝い金贈呈他                      | 障がい福祉サービス：重度心身障がい者医療費助成、障がい者等通所送迎車運行、難病者援護金支給他                      | 予防接種：法令で定められている大人の定期予防接種／おたふくかぜ・ロタウィルスなど任意の予防接種（助成有）                                       | 国民健康保険上川医療センター<br>上川町花園町175 TEL:01658-2-1231                                                   | 0歳から高等学校卒業まで、医療費全額助成。<br>※入院時の食事代、薬の容器代、健康診断費用は助成対象外。                                 |

Think Future, Go Kamikawa



# KAMIKAWORK PROJECT®

<https://www.kamikawork.jp>

発行 2019年3月

制作 カミカワーク編集部

問合せ 北海道上川町役場産業経済課

北海道上川郡上川町南町180番地

TEL: 01658-2-4058



*I'm good.*

一流シェフに、酒蔵に、大手企業…

## 地域活性の好事例「上川町」 「日経—地方創生フォーラム」レポート



2018年10月、東京・大手町の日経ホールで「日経—地方創生フォーラム官民連携と地域連携で実現する地方創生」が開催されました。基調講演のトップバッターとして登壇したのは、上川町長の佐藤芳治氏と上川大雪酒造株式会社代表取締役社長の塚原敏夫氏。「地域の資源と外のつながりで創る地方創生—北海道・上川町の挑戦」と題し、上川町が取り組む事例を紹介しました。

続いて、「共創」で進める農業活性化」をテーマにパネルディスカッションが開かれました。地方創生を照らす連携を「共創」というキーワードをもとに、北海道上川町という具体的な事例を軸にしながら、議論を深めました。



上川町町長の佐藤芳治  
(きとう・よしじ)氏

### 6次産業化 地方創生ビジネスを展開 『上川大雪酒造・緑丘蔵』

このレストランを三國氏と一緒に運営するのが、塚原氏です。レストランはオープンから5年後には、ミシュランガイドに掲載されましたが、人材確保や収益に課題がありました。

「町おこし自体を成功させないと、クオリティの高いものを作っても経営が成り立たない」と、塚原氏は日本酒の酒蔵『上川大雪酒造・緑丘蔵』を作ります。コンセプトは「6次産業化地方創生ビジネス」。商品展開はインターネットで流通させてもいい酒、北海道で消費してほしい酒、地元で飲みに来てほしい酒の3種。週末は、札幌から日本酒を買い求めに来る飲食店関係者もいるそうです。



大雪山国立公園をはじめ、豊かな自然に囲まれた北海道上川町



上川大雪酒造株式会社の代表取締役社長である塚原氏が、有名杜氏を誘って立ち上げた「上川大雪酒造・緑丘蔵」

### 町の大きな財産である「層雲峡温泉」の 魅力・価値を高める施策

佐藤町長は基調講演で、国内外から年間200万人が訪れる「層雲峡温泉」にふれ、「その魅力・価値を高めるための施策を進めなければならない」と訴え、一例として『大雪 森のガーデン』を挙げました。

2014年4月に全エリアがオープンした『大雪 森のガーデン』は、大雪高原の季節の花々を楽しむことができる施設です。

「コンセプトは『おもてなしの森』。大雪山の景観と自然の森と、その中にガーデンが調和しています。町民の癒しの森というような施設でもあります。町内交流と、外部の交流、さらにここを層雲峡観光と連動させて発信することが大事だと考えています」と佐藤町長。ガーデンに隣接されたレストラン『フラテッロ・ディ・ミクニ』では、フレンチの巨匠である三國清三氏がオーナーシェフを務め、地元食材を使った料理をふるまいます。このレストランがオープンしたことで、周囲のホテルも刺激を受け、レベルアップにつながったそうです。

### 緑が、大きな可能性へと広がる

2018年4月には、上川町と株式会社スノーピーク、上川大雪酒造株式会社との3者で、『観光振興および地域活性化に関する包括連携協定』を締結しました。また、㈱マイナビが運営するマイナビ農業情報ポータルサイトと連携し、上川町の取り組みを全国に発信しています。佐藤町長は「町には若者移住者が増加してきている。また、町のファン、応援団、そして人脈が広がってきている。これは今後の町にとって非常に大きい可能性を意味しています」と話します。地方創生のひとつのモデルとして、上川町の今後の動きに目が離せません。

# GO TO NEXT KAMIKAWA!